



私たちにできること

～被災地支援チームからの報告～

佐賀県では、3月11日に発生した東日本大震災の被災地（宮城県の各地域）に、県及び市町の職員を派遣しています。小城市からも4月19日から7月5日までに13名を派遣しています。

派遣した職員より現地の状況をお伝えします。

被災地へ行って感じて
たこと…

・テレビを通して見る映像や新聞等で掲載されている写真で予備知識があると思っていた。しかし、その映像が、四角い枠のない状態で前も後ろも右も左もすべての方向に光景として目の前に広がっている。その光景を言葉に出して表現しようとしても表現しようがない。どうしようもない…。

・避難所に来られている方にばかり目（取り上げられている）がいつているのが不安。テレビではあまり取り上げられていないが、避難所に入りきれない（集団の中に入っていない）方もたくさんいらっしゃった。被災者の方は「もらえるものはありがたい…」と言われていたが、物資の仕分けをしている中で、「これ

は誰が着るんだろう…」と思われるような、在庫処理のような感覚で送られてきている物資が多かった。

・マスコミの報道の仕方にも問題があるように思う。目立つところだけを報道するのではなく、被災地からの要望を全面に出して報道するとミスマッチなものが届くことはないのでは。実際、現地に物資が届くのは2日後。必要とされるものは次の日には変わってくる。

・被災直後は、物資が途絶えるため、ある程度の支援物資も必要になるが、1か月も過ぎると、少しずつではあるが被災している場所でも流通が始まるところもあり、物資にも余裕が出てくる。しかも、その地域、地域で必要としているものは違ってくるため、形を変えられる義援金としての支援が一番だと思えた。



(上) 一面に広がる震災の爪痕。
(中) 炊き出しの様子。(下) 全国から集まったボランティアの皆さん。

ドラム缶風呂へ書かれた
「笑って入浴してください」のメッセージ。



体育館で行われた手作りの結婚式。



子どもたち主催の
「ミニ運動会」

一番印象に残った言葉や風景：

- ・ 過酷な状況で生活されているのに、手伝いにきた私たちに対する「来てくれることで、元気がでるよ。」といった気遣いの言葉や「何もしなくていい。帰ったら自分の生活をしたらいよいよ。」という言葉。被災者の方の前向きな姿勢や笑顔を見ると自分ももつと強くならなくては…と思えた。
- ・ 山には雪が残り、桜の花が咲いている中で鯉のぼりが泳いでいる風景。

今思うこと…



津波の時間で止まった時計。

- ・ 最初、被災の状況を見た時はあまりの凄さに復興の光が見えないと思ったが、東北の皆さんの強さや帰る時にかげられた「3年後には絶対に復興しますから」の言葉に、ぜひ、復活した姿を見に行きたいと思った。そして、街の様子やお世話になった職員さんに会いたい。
- ・ 自分の悩みは小さいことだと思った。被災者の方は強くて、明るい方が多く、がんばろうという人が多かった。前向きに行こうと思った。「自分できるところからやればいい」と思う。特別なことをしなくとも、まずは日々の仕事、やるべきことを一生懸命にすればそれが支援にもつながっていく。
- ・ 帰ってきたこの瞬間にも被災地では避難所で生活を送られている方がいる。どうされているのか1日に何

回か思う時がある。

- ・ 普通の生活、お腹がすけば食べたものが食べられ、のどが乾けば好きなものが飲める。暑ければ、クーラーで涼しい思いもできるし、家に帰れば家族がいる。このあたりまえの生活が普通に送れていることが幸せだと感じる。

- ・ 被災者の生活面など全ての事をやるのではなく、被災者に役割を作ってあげることで、自分で自立しなければと思ってもらう支援も必要と感じた。そのためには一緒に活動し、コミュニケーションを図ることが大切になる。

これから小城市（地域）で必要とされることは？

- ・ 行政主体の運営だけではどうしようもないと改めて感じさせられた。なぜなら、大きな単位（小学校の体育館等）になればなるほど、リーダーがいらないため、まとまりがなくなってくる。しかし、自治会単位や集落単位（地域の公民館等）でリーダーのいる避難所では自治が確立されていて、食事の支援や支援物資の配給も自分たちできちんと管理されていたから。
- ・ 家族や助け合える仲間がいると頑



被災地で見たこと、感じたことなど意見を交わした報告会。



全国から寄せられた支援物資。

張れる。「1人じゃないよ。」と思える、人と人とのつながりやきずな、地域の（コミュニケーション）作りが大切になってくる。